

派生社会化する社会

——高田保馬の社会類型概念からの一考察——

広 田 ともよ

(受付 2014年10月31日)

1. 社会類型概念

事象、時間、空間の相違があるものを類型化するということは、その基準軸を固定することを免れないため、本来存在する大小さまざまな相違が潜在しているにもかかわらずそれを埋没させたままで類型化に挑まざるを得ない。ルーマンが「問題をきれいにいずれかひとつの方向で解くことは、はじめから断念しなくてはならない。かかる一面化を避けた分析だけが実を結ぶのである」(春日淳一2005)というのを見事にその事実を表現している。しかしそれは類型化という作業自体が宿命的に欠陥をはらまざるを得ないことを浮き彫りにするものでもある。こうした不可避な欠陥を抱えながらも、ある基準軸を用いて対象を整理分類し比較することは、単なる徒勞ではなく、これまで見過ごされていた存在や変化を断片的一面的にでも把握することが出来るある種の“発見”を与えてくれる場合がある。

社会学史にあがる代表的な二分法概念¹としては、デュルケムの機械的連帯／有機的連帯 (solidarité mécanique/solidarité organique), スペンサーの軍事型社会／産業型社会 (militant type of society/industrial type of society), テンニースのゲマインシャフト／ゲゼルシャフト (Gemeinschaft/Gesellschaft), マッキーヴァーのアソシエーション／コミュニティ (association/community), 高田保馬の基礎社会／派生社会, メイヨー・レスリスバーガーのフォーマル・グループ／インフォーマル・グループ (formal group²/informal group), クーリーの第一次集団／第二次集団 (primary group/secondary group³), レヴィ＝ストロースの冷たい

- 1 概念導入者が対比の形態をもって表現したか、対比形態であってもその用語がさすものが同次元において本当に2項対比関係にあるのかそうでないのかにかかわらず“／”を用いて記述する。
- 2 ただしホーソン実験でインフォーマルな集団を発見、後に対概念としてフォーマルグループが並べられた。
- 3 ただしクーリーは intimate face-to-face association and cooperation を特徴とする集団をさす言葉として第一次集団としたのみであり、第二次集団はその対概念として後の社会学者によって用いられた概念。

社会／熱い社会 (sociétés froides/sociétés chaudes), ベルグソンの閉じた社会／開いた社会 (société close/société ouverte) などが挙げられる。M. ヴェーバーの「理念型」も含め、そのどれもが事象・時間・空間にかかわらずまた例外もなく全ての現象に対して通用するというものではないが、しかしそのどれもが少しずつ違う切り口をもった鋭い観点から、社会構造の一局的な把握に対して大きく貢献するものである。その「限定性」をふまえた上で類型概念を用いるのであれば社会の構造そのものを見るにも、その動的方向性を探るのにも有効な手段であると考ええる。

本論では高田保馬の社会類型概念である基礎社会／派生社会を主軸として、社会構造が現在どのような動的方向性をもって変動していくのかを考察してみたい。

2. 高田保馬の「基礎社会／派生社会」の定義

「基礎社会」「派生社会」という用語は高田が『社会学原理』(1919)の中で定義した社会類型概念である。まず本書は四つの篇で構成されている。

第一篇「社会学」では社会学の概念や研究対象・設定について定義がなされ、第二篇「社会成立論」では社会成立のための心理的機制として積極的結合／消極的結合、同質結合／異質結合の結合原理について、またその結合を維持崩壊させる道具としての社会意識について論じてある。第三篇「社会形態論」では直接結合(=愛着による結合)／間接結合(=利益のための結合)の要素がどの程度含まれるかによって直接社会、直接間接社会、間接直接社会、間接社会という表現を用いてそれぞれの性質を述べ家族・国家・地域団体・職業団体などを具体的にそれらに区分し、そのうえでそれらの相互関係を静的動的視点から論じている。最後の第四篇「社会結果論」では社会の動的方向性により文化の発達、自由の発達、個性の発達という流れの必然性が描かれている。

基礎社会・派生社会という用語は、この第三篇の中で「自然社会人為社会——基礎社会派生社会」として対比した形で出てくる。直接結合を主とする社会は「血縁ならびに地縁の密接なるに従ひて相結合することは、その性情の自然に出づと云ひ得べし」これを「自然社会」とし、この自然社会に対して人間の特別な努力により作り出された「構成せられたる社会」これを「人為社会」とした。そして「自然社会は人為社会の基礎たり、前提たり。前者なくして后者の派生せられ繼起し來る事なし。また之を同時的依存の關係より考ふるも、人為社会はたゞ自然社会を基礎とし、之なくして出現し來る事能はず。かくて、吾人は自然社会を稱して基礎社会と云ひ、之に對して、人為社会を派生社会と呼ぶ。」として基礎社会／派生社会の用語が定義されている。(同937-9頁)

ここで注意したい点は、自然社会(=基礎社会)なくして人為社会(=派生社会)は生成

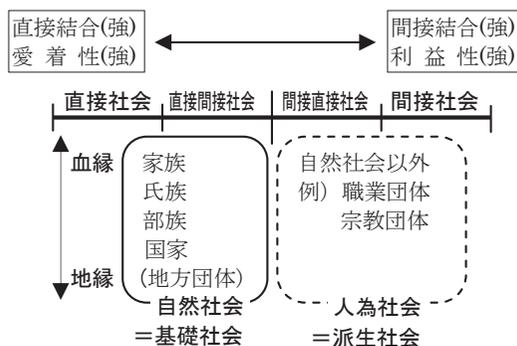


図 1

されないという関係性である。この2つは互いに相いれない完全対立構造をもっているのではなく、相互に補完性をもちつつ対立しているという点である。またこの相互補完性の関係において、愛着的要素が強く自然なかたちで結合する「基礎社会」が先に基底を成し、その上で利他的要素が強い「派生社会」が形成されるとしている。

確かにわれわれ人間が生物である以上、まず誕生のためには父母という両存在が不可欠である。それは生活世帯の構成員上の関係としての父母という意味ではなく、生物学上のオス・メス・産まれてくる子という関係での父母である。私たちは産まれ出ると同時に自分のルーツとしてどのオス・メスの子であるかの「血縁」と、地球上のどの国どの地域に属するオス・メスの子であるかの「地縁」を自動的必然的に持つことになる。そこに選択の余地はなくこのルーツなしに誕生するということはない。そして誕生後にはその血縁・地縁に基づきいわゆる社会化も自然に行われ、生活様式や作法、価値観など自然に身につけていく。そのプロセスにおいて様々なコミュニケーションややり取りを重ねていくうちに愛着性や愛情を強くもつようになる。こうして無意識のうちにも私たちは自然に社会に属している。

また高田保馬は基礎社会に分類されるものを「國家、地方團體、又は氏族、部族等の如く地縁血縁によりて成立せる社會即ち基礎社會」として挙げ、さらにそれらを規模別に「基礎社會には常に其包括する成員の数の大なるものと小なるものがある。例へば今日に於ては國家の成員は縣郡の成員よりも其數大に、縣郡の成員は家族の成員よりも其數大である。かかる基礎社會のうち成員数の最も大なるものを今假に大社會と云ひ、其最も小なるものを亦小社會と云ひ、其中間に位するものを中間社會と云ふ。今日の社會に就いて見るならば國家は大社會であり、家族は小社會である、而して縣郡等は中間社會である。」と基礎社会を大中小の3つに分類している。(高田『社会学概論』1922, 365-6頁)

3. テンニースのゲマインシャフト／ゲゼルシャフトとの比較

1) 高田保馬（日本1919年）の概念

基礎社会	名 称	派生社会
自然社会 血縁ならびに地縁にしたがって密接に結合し、自然に生成された社会	社会の生成	人為社会 人間の特別な努力により「構成せられたる」社会
直接結合	結合	間接結合
愛着的要素	要素	利益的要素
家族 氏族 部族 地域社会 国家	具体例	自然社会以外 例えば企業、各種職業団体や組織。 宗教団体など

2) テンニース（ドイツ1887年）の概念

ゲマインシャフト (共同社会)	名 称 (訳)	ゲゼルシャフト (利益社会)
「実在的有機的な生命体」	喩え	「観念的機械的な形成物」
共同の所有	原理	排他的個人的所有
「本質意志」 人間に生まれながらにそなわっているもので「適意」「習慣」「記憶」という形式をもつ	意志形式	「選択意志」 思惟の産物であり「考量」「決意」「概念」という形式をもつ
全人格的な融合・愛着・信頼によって離れがたく結びつき、彼らの間では共同生活が組織され、共同財の所有と享楽が行われる。	この関係にある者同士	契約や協定によって成り立ち、利益のために結合し、合理精神にもとづく契約を取り結ぶ。人々は互いに結びつきながらも孤立している。
①「血のゲマインシャフト」 「親密性」(一体性、相互了解)に依拠。血縁によって結びつく。「血の共有」すなわち「肉親」「血族」「家」。 ②「場所のゲマインシャフト」 「慣習」「民俗」によって立つ。田畑を共有する「場所の共有」すなわち「近隣」や「村落」。 ③「精神のゲマインシャフト」 「信頼」によって立つ。職業や宗教を媒介とする「精神の共有」すなわち「朋友」や「都市(大都市ではなく手工業が営まれる住民自治が行われる都市)」がある。	具体例	①「交換のゲゼルシャフト」 契約や協定に由来。「商人(ブルジョワ=経済的的市民)」として振る舞う。「市場」あるいは「大都市(メトロポリス)」。 ②「法のゲゼルシャフト」 「法律」(合理的行政)に由来。「公民(国家市民)」となる。「(合理的)国家」。 ③「知識のゲゼルシャフト」 「世論」(知識や情報)に由来。「世界市民」となる。「知識人共和国」。

自然・生命体をイメージさせる「基礎社会」「ゲメインシャフト」、それに対して人工・機械をイメージさせる「派生社会」「ゲゼルシャフト」という対比のさせ方は非常に似ている。

またここで注目したい点は、「国家」はテンニースはゲゼルシャフトに分類しているが、高田保馬は基礎社会に入れている点である。1919年の日本は歴史的に見て、日清、日露、第一次大戦と10年ごとに戦争をした時代であることから外敵（外国）との対峙という意味で、「国家」としての結束が特に強まっていたという背景もあるのではないかと考えられる。

4. 基礎社会の拡大縮小の法則

高田保馬はこの基礎社会には一定の動的法則性がみられるとし「大社会は漸次に拡大する、之に伴ひて小社会は漸次に縮小する。これは過去の雑多なる事実から得られたる一の経験律に過ぎぬが、兎に角に基礎社会の發達方向を指示して居ると思ふ。之を稱して基礎社会の拡大縮小の法則と云ふ。」としている。これは、社会が進展するとともに大社会として位置づけられる国家の規模やその役割は拡大する傾向にあり、一方の小社会として位置づけられる家族の規模やその役割は漸次縮小する傾向があるというものである。その縮小の根本事情は極めて複雑で容易に説明できないとしながらも「分業の發達」にあるとしている。「分業の進歩は、家族の行届ける協働互助を不必要ならしめる傾がある。また家族成員の家族以外のものに對する不斷の接觸は、家族の結合そのものを幾分か弛緩せしめる様である。」とある。

確かに、家族で生業として一家総出で農作業をし、家事全般をこなし、年老いたおじいさんおばあさんや子どもたちの世話をしていた時代から、現在の日本における一般家庭の現状は、食事も外食に頼ったり外食とはいかないまでも食卓に並ぶ料理は中食化が進んでいき、洗濯も手間がかかりそうなものはクリーニング業者に簡単に出せる。家族が高齢になり介護が必要になると施設や介護サービス業者に頼ったり、子どものしつけや教育も保育園や学校や様々なスクールに任せたりと、これまで家族内で行っていた多くのことが様々な局面において「外注化」している。家族内でのやりとりが外部化した分だけその結合は希薄化してくるのは当然の結果であると考ええる。

5. 派生社会化する社会

まず、基礎社会の最小単位である「家族」という視点からみると、人々の結合が定量であるとするならば、「外注化」ということは、どんどん人々の結合が「派生社会」のほうへ吸い取られると言い換えることもできる。愛情や愛着といったものをメディアとして交換されていたところが、貨幣というメディアに取って代わられることになる。インフォーマルな

関係性（本音・寛容）が希薄化し、日常生活の様々な局面がフォーマル化してくる。そこで規則による制御がなされることになる。

それでも家族というものはやはり必要であると考え。愛情や愛着の結合という意味でも必要であるが、そうでなくても家族を生活基地として捉えるならば家計のための結合として必要となってくるであろう。その場合、血縁というものもあまり重要視されなくなってくる。離婚の増加や、家計を一にする集団（シェアハウス・カーシェアリングなど）が増加することも何ら不思議なことではない。

つぎに、基礎社会の最大単位である「国家」という視点からみしてみる。前述のとおり1919年の日本においては「国家」は基礎社会として認識されていた（ドイツのテニースは「国家」はゲゼルシャフトとして区分していた）。それから約100年経過した現在、果たして「国家」は基礎社会（愛着的要素をもつ）として区分されるであろうか。もはや国家は派生社会として区分した方が感覚的にしっくりくるのではないだろうか。

このように基礎社会の最小単位の家族から、最大単位の国家まで、派生社会化しているのではないかと考えられる。高田保馬も「基礎社会衰耗の法則」として「基礎社会の運命は生物進化に於ける爬虫類の運命にも似たるものがある。」としている。

いつの時代においても人間が生きていく過程において、愛情や愛着によるつながりは必要不可欠なものと考え。社会が派生社会化すればするほど、基礎社会がより貴重で重要なものとなってくるであろう。高田保馬も「自然社会（＝基礎社会）なくして人為社会（＝派生社会）は生成されない」「愛着的要素が強く自然なかたちで結合する「基礎社会」が先に基底を成し、その上で利益的要素が強い「派生社会」が形成される」としている。「爬虫類」は希少な生物となっているかもしれないが未だ絶滅はしていない。基礎社会を、血縁関係をもつ家族と限定しなくともよいであろう。血縁関係はなくても、また家族でなくてもよい。愛着的要素が強く自然なかたちで結合する人間関係と置き換えてもよいであろう。ブラックホールのように吸い込みつづけ拡大し続ける派生社会の側に、この基礎社会という人間社会の“基底”部分を私たちはどこまで手放していくのであろうか。

参 考 文 献

- 春日淳一，2005「社会科学における説明図式の次元構成：3次元か4次元か」『關西大學經濟論集』55（1），133-151
- 森岡清美・塩原勉・本間康平編，1993『新社会学辞典』有斐閣
- 日本社会学会社会学事典刊行委員会，2010『社会学事典』丸善
- 大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一編，2012『現代社会学辞典』弘文堂
- 高田保馬，1919『社會學原理』岩波書店
- 富永健一，2001『社会変動の中の福祉国家—家族の失敗と国家の新しい機能』中公新書

Summary

Society which does secondary socialization

—— Consideration about Yasuma Takada's social type concept ——

Tomoyo Hirota

This report talked on the society type concept that the inside of social change theory is the big field. There are many manners of its type, a concept of Japanese Yasuma Takada's and a German Ferdinand Tönnies's concept were compared in particular. Through this comparison, Modern society sees the one how doing fluctuate or its way.

追 悼

昨年私の恩師である日隈健壬先生が急逝されました。学部生の時、日隈先生の一般教養の授業を履修したことが縁で、当時学科も異なっていたのですが、研究室の手伝いをするよう声をかけて下さいました。先生には勉学として社会学のことも教わりましたが、それだけでなく、まさに実学として地域社会に関する事、それにつながる人々のことなど、本当に幅広く様々なことを教わりました。日隈先生に出会ったことで私の人生も大きく変わりましたし、今の私があるのは日隈先生のおかげであると本当に心から感謝しています。

その日隈健壬先生追悼記念号ということで、先生の大学院の講義「社会変動論」の中で勉強させていただいたことを、当時のノートを元に思い出しながら、先生と歩んだ足跡を1つ残すつもりで、つたない文章ですが書かせていただきました。先生から「もっといろいろやっただろう」とお叱りを受けそうです。

もう十数年前のことになりますが、当時この「社会変動論」では、教科書の1章もしくは1項ごと、担当の学生を決めて発表し合う方式で授業が進められました。しかし社会人入学の学生が多く、先生の期待されているレベルの発表ができず、教わってもなかなか到達できない私たちに四苦八苦されながらも、先生あの独特なユーモアにより、いつも笑いの絶えない講義でした。そのことがつい先日のことのように思い出されます。当時の教え子たちは卒業後大学で教鞭をとる者も多く、他、会社経営する方、地域社会へ貢献する方などなど、今でも各大学各方面で活躍されています。先生は亡くなられても私たち門下生の心の中にはこれからもいつもその存在は生き続けていくものと思います。